

【学生による ESD 支援活動】

東大寺寺子屋～世界遺産のお寺で、気づく、学ぶ、考える～ 支援報告書

特別支援教育専修 4 回生 板口 咲希

1. 日 時 平成 30 年 8 月 24 日（金）13:00 ～ 平成 30 年 8 月 26 日（日）11:30
2. 場 所 東大寺山内（二月堂参籠所、同北茶所、奈良親子レスパイトハウス、大仏殿、二月堂ほか）
3. 参加者 奈良市内在住の小学 5 年生～中学 3 年生 20 名
佐野宏一郎（大学院生）
森本珠美怜、板口咲希、藤井愛華、義根敦司、北将伍、足立繁郁、西田朱音（学部生）
准教授 1 名、研究員 1 名

概要報告

平成 30 年 8 月 24 日～平成 30 年 8 月 26 日に、東大寺山内にて「東大寺寺子屋～世界遺産のお寺で、気づく、学ぶ、考える～」が行われ、本学学生 8 名がその支援に関わった。1 日目は蓮の花の形を模したランタンを子どもたちが作り、それを持って夜の大仏殿をお参りした。2 日目は屋参籠体験、境内フィールドワーク、法話や座禅体験をした。3 日目はこの東大寺寺子屋で感じてきた 3 日間を漢字一字にして、それをうちわに筆で書いて発表した。

今回の活動支援を通して私が学んだことを以下の 2 点で振り返りたい。一つ目は「指導のメリハリ」、二つ目は「子どもたちの学びへの意欲を引き出すこと」である。

一つ目の「指導のメリハリ」についてである。今回の活動支援では、子どもたちが集団で活動に参加するよう大学生が支援・指導する機会があった。多様な背景を持つ子どもたちが 1 つの活動に向かって協力する態度は、学生の子どもへの働きかけで変化する。それぞれの子どもの行動には、その子どもなり



理由がある。しかしそれらの行動全てを良しとしていると集団として瓦解することも考えられるため、子どもの行動に対して適宜「指導する」ということが求められることになる。その子どもに行動の理由を聞いたうえで、他者に迷惑がかかったりするような理由であれば注意し、仕方ないような理由であれば認めるということを心掛けて私は寺子屋に臨んだ。しかし、実際は理由を十分に伝えることが難しい状況や状態があり、指導するタイミングを逃してしまうことがあった。褒めるところ、許容するところ、指導するところを十分に使い分け、子どもにも分かりやすい形で指導のメリハリをつけたいと考えた。

二つ目「子どもたちの学びへの意欲を引き出すこと」についてである。今回の活動では、普段子どもたちが経験できない、特別な体験ができる。それは、いつもは行くことができない「特別な場所」という面と、いつもは関わることのできないお坊さんたちとコミュニケーションをとることができる「特別な人」という面がある。子どもたちにとって「特別」というのは非常に興味をひくものであり、この活動では、「特別な場所」で「特別な人」から直接話を聞いたり、ものを見たりすることができるため、子どもたちの学びを深めることができたのではないかと考える。

この活動は、「特別な場所」で「特別な人」とともにみんなで学びを深めることができるものである。その特別な学びを十分に得るためには、子どもたちがひとつの集団となり主体的に体験できる環境が重要である。そこでしかできない体験やそのための適切な指導・支援を学校現場で働くうえでも大切にしていきたいと考える。